ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報紙

Take free!

なび

7月号
vol. 089

特集：都市のインフラ

子どもが育つとき

1

特集：都市のインフラ

子どもが育つとき 1

教育、育児、体育、育休、飼育、育成、、、
最近では食育や、イクメン、地育などの新しいことばも。
「育」の入ったことばは、さまざまなシーンに出てきます。
その時々に登場する人、思い、取り組みを見ていく
「子どもが育つとき」シリーズのはじまりです。

子どもたちを取り巻く環境は、日々刻々と変化しています。生活、家庭といった子どもたちの一番身近な場面もその一つ。教育、福祉、医療など社会構造に大きく関わってくる側面もあります。もちろん、場所としての学校や町会、コミュニティや、まちづくりなど、地域性も加わります。それら、いろんな場面が折り重なるようにつくられていく子どもたちの環境。複雑に絡みながら、子どもたちが育つときを刻みます。

そしてそれは、子どものためのとか、子ども向けにといった、切り分けられた環境ではなく、子どもも大人もともに育ち合う環境であるはず。地域や社会を育てていくことも大切な視点です。これから遊び学び育つ子どもと大人、地域や社会の今を追う「育つとき」を3回シリーズでレポートしていきます。初回は、西成のまちでのさまざまな動きを取り上げながら、子どもたちの〝いま〟を見わたしてみたいと思います。

子どもたちに潜む生きづらさ

西成のまちは、下町的な雰囲気を残すエリアが点在し、寄場や同和地区など特有な地域性もあり、近隣力、地域力を発揮できる素地がある。しかし一方で、虐待、DV、いじめ、不登校といった貧困に関わる課題が目立つ。たとえば、株式会社ナイスが拠点を置く西成区北西部、その地域である鶴見橋中学校区や梅南中学校区の小中学校児童・生徒のデータでは、生活保護世帯は大阪市小中学校全体よりも約3割高い。また、母子世帯の児童・生徒も全体の3割ほどである。もちろん、数値だけでは課題の本質は見えてこないが、複雑に貧困が集中しており、地域や都市政策での取り組みが模索されてきた。

さかのぼれば、慈善事業家、石井十次[※1]などがセツルメントとして子どもたちの福祉を手掛けた時代、戦後混乱期、大阪が都市課題として福祉の政策を打ってでた時代、同和地区としていくつもの事業を動かしてきた時代などを経て、今がある。その多くに共通するのは、子どもたちの生活衛生、教育環境、家庭環境などの福祉的な課題である。今回は、それらをベースにしつつも、この20年ほどの間に展開された地域での新たな取り組みに目を向ける。長い歴史からすればわずか20年というスパンにも、西成のまちでの特徴や、子どもたちに関わる新しい動きも見て取れるからだ。そしてもうひとつ、福祉的な課題を発見して福祉的に解決するだけでなく、地域の多様なアイデアでマイナスをプラスにしようとする流れも出てきている。西成に限らず、社会に暮らす子どもたちの生きづらさを、生きる楽しみや喜びにつなげるような若い動きにも注目してみたい。

小さな単位からの取り組み

何かしらの生きづらさを抱えた子どもたち。20年ほど前、一人ひとりと向き合うきっかけを築いた二つの動きが出てきた。「西成地区教育ケース会議」と「あいいりんこども連絡会」である。どちらも、学校や、施設、児童相談所、病院、子どもに関わる機関が集まり、子どもとその家庭の支援を考えるケース会議[※2]を開き、教育・家庭・生活全般にわたる課題を解決すべく知恵

を出し合ってきた。

そのひとつ、「西成地区教育ケース会議」のきっかけは、身近な暮らしの課題に向き合おうという動きからだった。1996年、西成区北西部で、大阪市同和事業促進地区協議会（現在の西成人権協会）が、総合生活相談センターの活動を始める。人びとが抱えるさまざまな生活相談を受け、応えていく。そこでキャッチした地域の課題を、具体的な取り組みや都市・地域政策に反映させていく小さな拠点となった。

地域に暮らす人たちの声を集めていく中で、子どもたちの貧困にも視線が向く。そこで呼びかけられた近隣の7つの学校から生活指導の担当者、地域、区役所、児童相談所、ケースワーカーなどの関係者が集まり、子どもたちの生活課題について解決への糸口を探るようになる。この場が後の「ケース会議」となる。

長年この地域の中学校で生活指導を担当し、ケース会議の担い手でもあった西川祐功さんは、この場を「教育の科学化」と表現する。その当時、学校では、2割が生活保護を受ける世帯の子ども、6割が就学援助を受ける子ども、合わせて8割が生活支援を受けている状況であった。しかし、生活保護だからといって、しんどいという単純な話でもない。実際には、生活保護世帯でもしっかりがんばって生活している家庭もあれば、逆に経済的に安定していても、いろんな困難にぶち当たり、つまずいたり崩れていく子どもたちもいた。複雑に生じているいろんな困難を、適切に学校という場で把握することが求められていた。

「虐待や不登校、非行問題、そういうものをケース化して、分析をしながらみていく、いわゆる『教育を科学化』することでなにかを見つけることができないか、この教育ケース会議の中でずっと考えてきました」と西川さんは言う。ただ課題として発見するだけでなく、課題となる背景を浮かび上がらせることに力を注いだ。

さらに、この場がより地域との関わりを育てていく流れをつくったのが、「地域里親」という発想である。地域で生まれた子どもたちを排除せず、地域とともに課題に向き合う考えである。この地域が負担しあいながら子どもらを支える仕組みを、学校の卒業までではなく、子どもが成人する20歳まで「切らない支援」を続けるというスパンに組み込んだ。それは、全員が納税者になれるような数珠つなぎの教育の実施でもあり、本来の生きる力を身につけるキャリアデザインともいえる。子どもたちが、将来、社会的・職業的に自立し、地域の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力を育てる。それを小学校、中学校と卒業の度にぶつ切りになりがちな学校だけでなく、地域も担う形を実現しようと奮闘した。

知恵の出し合い、持ち寄りネット

「みんなで持ち寄って何とかするという仕組みが、ものすごく効果的だということにやってみて気づいた」と、わが町にしなり子育てネット前代表の谷川雅彦さんは、ケース会議での成果をまた別の見方でとらえる。

「西成地区教育ケース会議」や、同時期に立ち上がった「あいりんこども連絡会」では、まず、子どもたちのSOSをキャッチする発見者として、子どもたちが日中長く過ごす中学校、小学校、幼稚園、保育所、あるいは家庭に訪問できる生活保護ケースワーカーが活躍した。そして、課題を発見者が抱え込んでしまうのではなく、地域で共有・理解しながら解決していく場をつくったところにポイントがあった。「発見」→「解決」の一方通行だった支援に、「持ち寄り」というプロセスを加えることで、他者の目、地域の目が入るようになり、地域で応援しようというモチベーションが育ち、閉鎖的だった支援の枠を少しずつ押し広げられていく。

その花が開いたのが、「わが町にしなり子育てネット」である。西成区内の2地区におけるケース会議での「教育の科学化」「地域里親」「持ち寄り」などの実践をきっかけに、この仕組みを西成区全域に展開しようという動きが出てくる。北西部（同和地区）と、北東部（あいりん地域／釜ヶ崎）のそれぞれの地域のケース会議に関わっていた谷川さん、寺本良弘さん（西成区要保護児童対策地域協議会元座長）と、小掠昭さん（当時、わかくさ保育園園長）、荘保共子さん（こどもの里代表）が、同時に「わが町にしなり子育てネット（以下、子育てネット）」の構想を抱き、タッグを組んで、2000年5月の結成にこぎつける。地域で子育て・子育ちを応援できる顔の見える関係をと、当初は西成区の38の地域団体がネットワークしてスタート。現在は、70以上のつながりで多岐にわたり活動を展開している。

課題の種をアイデアへ育てる

子育てネットは「いつでも、どこでも、みんなで子育て」をキャッチフレーズに、地域ぐるみで子育てを応援する取り組みを行っている。それを支えるのは、地域の人である。保護者のサークルをはじめ、地域住民、子育てや教育に関わる団体や、相談機関、児童館、学童、そして幼稚園、保育所など、さまざまなレベルで地域の人が、子育ての課題から、自分たちで何かできないかとアイデアを出し合い、形にしている。

例えば、乳幼児とその保護者が安心して子育ての悩みを持ち寄れる居場所づくりとしてスタートした「サロン012」、そんな子育ての情報発信や出会いにつながるイベント「子育ての集い」「フリーマーケット」、子どもたちの遊びを持ち寄り地域イベント化した「子ども元気まつり」や「あそぼパーク☆project」、発達の気になる親子の子育ち・子育て支援の場「ほっとサロン・あん」、10代で子どもを産み育てるお母さんを応援する「コロコロクラブ」、児童虐待からの保護者の立ち直りを手助けする「MY TREE ペアレンツプログラム」、他にも、子どもの想像力と関係性を引き出す「かえっこバザール」などの活動が生まれた。

どれも、課題を丁寧に見つめながら、一つの解決策ではなく、いくつものアイデアで内包しようという姿が感じられる。支援する側、される側という課題解決型の上下関係ではなく、みんなでアイデアを持ち寄る中で培われた人と人とのつながりであり、しんどいときに安心できる見守り見守られる関係である。

地域で、地域と育つとき

個々人の問題としてではなく、地域や都市の課題として広がる貧困。西成もインナーシティの複雑な課題を抱えている。それらに応えるように、地域ではさまざまな動きを生み出し、育ててきた。そして現在、そのような状況をガラッと変えるかもしれない都市政策「西成特区構想」など動いている。西成区を子育て世帯の暮らしやすいまちにと、関連する事業も始まっている。しかし、地道に丁寧に取り組んできた地域のノウハウもある。西成特区構想として出されたプレーパーク事業も、行政ではスピード感を持って進められているが、一方で地域側からもこれまで取り組んできた動きとともに関わりを模索しているようにも見える。お互いの力や役割を持ち寄れば、ただの解決指向の事業でなく、子どもたちも大人たちも地域もともに育つときを刻めるプレーパークや西成特区構想になるかもしれない。

本シリーズでは、子どもを軸に、地域で生きる「子どもの育つとき」をとらえながら、都市の豊かさを探っていく。

（平川）

注釈

※1 石井十次
日本で最初の孤児院をつくり「児童福祉の父」と呼ばれる。1909年に、当時、大阪の貧困地域であった、西成区にほど近い日本橋付近で、愛染橋保育所、愛染橋夜学校を設立。それら事業を引き継いだ社会福祉法人石井記念愛染園は、現在も大阪、西成で、隣保事業を展開している。

※2 ケース会議
児童福祉法により各市町村に設置されている要保護児童対策地域協議会（子どもを守る地域ネットワーク）における、個別ケース検討会議。虐待をはじめ、保護や支援が必要な子どもたちを地域が連携して対応していくためのネットワーク。西成区では、法定化される前に二つの地域で先駆けて取り組んできた。

[平川隆啓]今回のなびトークで佐那河内合宿も現実味を！？あと同じ徳島県だと、海部町にも行ってみたいです。とても自殺率が低く、人の個性や意思を尊重しながら、ゆるくつながる程良い距離感のまちだそうです。

No.14

「いろんな人と場と取り組みをつなげる」をテーマにお届けするリレーなびトーク。7月号は、前回に引き続き臣永洋子さんと、西成の子どもやまちづくりに関わる寺本良弘さんのお話です。特集でもふれた西成で子育てを応援しようと続けてきた取り組みと、都市と農山村をつなごうとはじまったばかりの動きが、ひょんなつながりを得る機会に。そんな話を、天神ノ森のあおぞらアトリエで明るい笑いにつつまれながら繰り広げました。

プロフィール

臣永洋子
大阪の西成と徳島の佐那河内を行ったり来たりしながら、地域と地域、子どもと大人をつなぐ取り組みをコツコツ進行中。６月には西成の親子で佐那河内バスツアーを開催！

寺本良弘
部落解放同盟西成支部長、ヒューマンライツ教育財団の事務局長。西成区で実質的に二人しかいない里親の一人。いろんな面から西成の子どもたちを見てきた地域の顔です。

寺本：多分、西成に来られるとき「なんで西成？」って思わはったでしょ？

臣永：ええ、思いました。

寺本：それ、普通ですよ。

臣永：でも、想像とは違いました。いろんなしんどい状況は確かにあるけど、それを乗り越えようとする姿もたくさん見えてきました。

寺本：ですねん！西成のことをよくわからず、よく見ようとせず、西成に仕事とかで来るとなると、これまた難儀なんですよね。

臣永：実際に暮らして気づいたんですが、他人事じゃないんですよね。私だって、子どもだって、そういう状況に置かれるかもしれない、そう思っています。

・・・・・・・・・・・・・・

寺本：例えば、虐待防止とかよく聞くけど、それは周りの大人が言っているだけの勝手なものが多い。問題として取り上げるだけじゃなく、まずは身近に応援したらなあかん。そんな、おせっかいメンバーが集まって、わが町にしなり子育てネットをつくったんです。最初は30ちょっとのメンバーから始まり、いまは70ほどになっています。

臣永：おー、すごいですね。

寺本：子育て支援の動きも、制度や行政に振り回されがちだけど、西成では、逆に引っ張るくらいの勢いをもって、地域でもっと寄り添いながら応援する仕組みをつくってきたんです。

臣永：私も、取り組みのきっかけは、子どもたちなんです。もっと、自然に触れて育ってほしいなと感じていました。私がこのまちに来る前に暮らしていた徳島の自然豊かな佐那河内と、都市部の西成の子どもを、まずはつなぐ取り組みをぼちぼち始めています。

寺本：それが、このバスツアーですか。

臣永：そう、佐那河内村の協力で、バスとスタッフもつけてもらい、一泊二日で、30人ほどの親子で田植えをしたり、古民家にとまったり。みんなどろんこになって楽しんでもらいたいです。

寺本：子育てネットでも、西成公園で毎年、泥だらけになりながら水遊びするイベント「あそパー」をやっていて、その姿を見ていると子どもの力ってすごいなと感心します。もっと自然や人に触れて、もっと引き出していければなぁ。子育てネットでも、子どもたちと佐那河内に行きたいですね！

臣永：ぜひぜひ。そして、子どもだけでなく、親も一緒に。実は今の大人も自然とのふれあい方に慣れてなくて。バスツアー申込みのときに何がいるの？とか、どんな場所なの？とか質問責めでした。わからないから不安なんだと思います。でも、何もない佐那河内の自然に身を置いて、ありのままに楽しめればいいなと。子どもも大人も一緒にぼちぼち育ちあう機会になればと思います。

・・・・・・・・・・・・・・

寺本：確かに、子どもだけでなく、大人や若い人で、何かと触れ合ったり、あと叱られたりすることで育つものってありますよね。

臣永：若い方は、とにかく情報も多いし、効率的で動きも早いんですが、ひと付き合いがなんだか下手だなぁと感じてしまいます。結果がでなければそこで終わり。どうにか向き合いながら乗り切ろうという姿勢が弱まっている気がします。

寺本：これから日本の社会活動がどんな風になっていくのかわからないですが、私のまわりで意見が一致するのは、10年20年後を見て人を育てあわないとあかんよねということです。そうしないと、地域や社会で取り組んできたいろんな力が、つながっていかないよねって言うてるんです。

臣永：一緒に若い方とお仕事していても、ちょっと考え方が違うなって思います。情報は集めるのは得意。でも、自然や、地域、人に触れながら何かをやることの経験が少ないからか、ギャップを感じます。でも、そんな機会こそが、なんだかんだ育つ力になるのかなと、そんな気がします。

寺本：これからは、若い人がやろうって思えるものがちゃんとそろってないと、変わらないのかな。やっていることへの生き甲斐、夢、そして暮らしていけるお金などがないと、私たちのような社会運動や、子どもたちを応援する地域活動とかは、できるわけないなって思います。

臣永：そう。だから、いま地域でやろうとしていることも、どう経営していくかという視点が重要だと思っています。

寺本：子育てネットの取り組みとか、いま動き出している「プレーパーク事業」とかも、行政に頼ってててはダメ。いつ予算が切られるかわからない単年度の事業ではなく、自分たちでお金も人も集めて、持続・自立していくことも必要ですよね。

臣永：だから地域ももっと経営感覚をもって、できることから形にしていける仕組みをつくらないと！自然から学ぶ場を増やしていくためにも、自治できる力を子どもたちと一緒に育てていきたいです。

寺本：孤軍奮闘されているのを見て、すごいと思いますわ。

臣永：そんなことないですよ。ぼちぼち、のんびりやろうと思ってますよ！一気にやろうなんて、無理な話ですし。

・・・・・・・・・・・・・・

臣永：ぜひ、徳島にも遊びにきてください。

寺本：まずは、子育てネットのメンバーで合宿を企画したいなー。

臣永：ぜひぜひいらしてください。夏なら20人ぐらい泊まれます。佐那河内は何もない徳島唯一の小さな村ですが、自然の魅力いっぱいで発見もたくさんありますよ。

次回は９月号。ホストを寺本さんにバトンタッチ。

「なび」をつくる(株)ナイスは、地域での取り組みも、社会に向けた取り組みもいろいろ。
多様につながる実践を紹介していきます。

ナイスな仲間たち

VOL.04 西成製靴塾

小林寛明 講師

手縫いの技を後世に残すために

「まちづくり立」の学校

大阪が「大大阪」になっていく時代、西成は革製品を作る職人の街という顔を持つようになりました。しかし今では国内の多くの製造業同様、西成の地場産業＝皮革業は衰退期に入って久しいのが実情。

靴職人の技術が失われることに危機感を抱き、地元の有志が力を合わせて設立したのが西成製靴塾です。つまり公立でも私立でもない、いわば「まちづくり立」の学校なのです。

みんなに知ってもらいたい靴づくりの楽しさ

本校の特色はすべての工程を「手縫い」で行う製靴技術を伝えることです。地元の現役の靴職人がその熟練の技術を、生徒一人ひとりに寄り添いながら一年間、みっちりと仕込んでくれます。

また、多くの人に靴づくりの面白さを知ってもらうために「モニター実習」ということで学生のお客さんになってもらい、採寸から試作品、納品までの制作工程を追体験していただいています。今年度も実施しますので「足」を貸していただける有志の方、事務局までお問い合わせください。

※制作費用として1万円かかります

（若松 司）

西成製靴塾
〒557-0025　大阪市西成区長橋 3-7-28-201
電話：06-6561-9990 担当：若松（西成企業連内）
E-MAIL：wakamatsu@n-net.gr.jp
WEB：http://www.nishinari-seika.com/

[飯田沙保里]梅雨入りしたのに、昔のようなじとじとした雨ではなく豪雨ばかりで日本の天候も変わってしまったなと思っています。

[高橋静香]今月出産を控え、なびのデザインは近藤さんにバトンタッチ。大きなお腹が苦しくて早く出てきて欲しいような、準備が間に合っていないのでまだ待って欲しいような、毎日がいっぱいいっぱいな今日この頃です。

いい湯かげん

大谷強さんを偲んで、来春を考える

大阪、関西を代表する社会学者大谷強さん(関学教授)が、5月19日70歳で逝去された。ボクにとって大谷さんは大恩ある人だった。

一つは、大谷さんは、1995年、西成の「地域立」社会福祉法人ヒューマンライツ福祉協会の初代理事長（非専従）を引き受けてくれた。まったくの未知の出発であった新設法人の舵取りを快く引き受けて頂き、軌道に乗り出したところで、二代目の摺木利幸現理事長にバトンタッチされた。我を出すこともしない、地位にこだわることもない、何とも爽やかな創始者であった。二つは、2001年、大阪府地域就労支援事業を創設する検討会の座長を務めて頂いた。同和事業にも精通されていた稀有の社会学者であった大谷さんは、日本で初めての自治体の就労支援事業の創設を導いて頂いた。三つは、2004年、大阪発日本初の、価格ではなく、雇用を競う「総合評価入札制度」が導入された際、評価委員の重責を担って頂いた。中立的な立場ということを慮って接触を自省していたのだが、折に触れアドバイスを頂いてきた。

話は変わるが、来年の統一地方選挙で橋下さんは、中選挙区制の大阪市議選ではおよそ不可能な単独過半数を狙って、知事選と市長選挙も重ねる「一からげ選挙」を仕掛けてくるだろう。大阪都構想が争点だが、結局は、維新と「左右からの」既得権益に拘る「大阪型保守」が、「橋下さんが好き、嫌い」と争うのだろう。大阪の行政に精通されていた大谷さんは、どんなアドバイスをくれるのだろう。案外と、ボクが大谷さんから薫陶を受けた前述の三つのことがテーマになるのではないか。

「地域立」すなわち、社会福祉と地域のコラボで新しい市民協働を提案する。「就労支援」すなわち、保育や介護だけでなく働く支援も含めた新しい福祉の受益と負担を提案する。「総合評価」すなわち、独占も価格競争も抑制した総合的評価で公共サービスの再価値化を提案するという三つだ。摺木さんは、すでに社会福祉法人の「非課税分地域投資」を実践し始めているし、西岡正次さんが精魂込めた就労支援の「豊中モデル」も反響を広げている。「総合評価入札」も「公契約条例」とも相俟って、府下の多くの自治体で実践されている。

橋下さんによって、二者選択式で民意を問う、賑やかな選挙スタイルがすっかり定番になった大阪では、熟慮型の政策競争にはなりそうにない。それでも、アベノミクスでもカジノ誘致でも特効薬にはならない地方財政と、拡張し続ける市民サービスのバランスを取る重要な選挙になる。多数は獲れなくても、「第三の道」、市民協働型コミュニティへの舵取りに、一石を投じる選挙にできないのか、大谷さんを偲びながら考えたいものだ。

㈱ナイス代表取締役
冨田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

[田岡秀朋]先日、自転車の前輪だけを盗まれました・・・まちの噂では前輪盗が流行っているそうです。お気を付けください。

[近藤彩]高橋さんの出産に伴い、代打でデザインを担当します。夏は苦手なので、日中はいっそう引きこもりになる予定。日暮れになったら動き出す、コウモリのような生活です。

ある日のRON

今月の花：ハイビスカス

花言葉「常に新しい美」
「勇敢」「華やか」

花は、１日で終わってしまうのですが、次から次へと鮮やかな色の花を咲かせてくれます。

昨年10月頃から入院していた浅やんが帰ってきました。毎日必ず店に来てみんなにコーヒーをごちそうしてくれていました。少し口の悪いおしゃべりな人ですが、その日は元気がなく、病院へ行くと結核でそのまま入院してしまいました。ドヤ住まいだったので、荷物を店で預かっていました。その浅やんが帰ってきたのです。これからまた元気な声が聞けます。良かったです。（なんばひとみ）

ピースのつぶやき

ピースの育ての母の赤井まゆみです。ピースがお喋りしたい事や思っている事を、これからもたくさん感じ取って、みなさんにお伝えしたいと思っています。

『私の秘密』

暑い夏がやってきた。
わが家のゆーちゃんは中学生。
お母さんに水着出してねって
お願いしてた。
私に、学校でプールが
始まるんだよって
ニコニコしながら話してくれた。
でも私の顔は
ピクピクと引きつった。
私のちっちゃい頃、
家族みんなで旅行に行った。
大きなプールがあって
まっ先に飛び込んだ。
そのとたん溺れてしまった。
それ以来プールには
行きたくもない。
犬かきの出来ない
犬のお話しを、
なびの愛読者さんだけに
教えちゃいました。
ワンワン!!

赤井まゆみ

枝葉末節

ミュージック フロム ビッグ ’70（2）

hidarimakiこと佐々木です。楽塾で、大阪の映画をテーマに、４月は『ゴジラの逆襲』を見ました。昭和30年製作の映画です。ゴジラが市内を破壊しつくしますが、６月、塾生とゴジラの足跡を探るフィールドワークをしてきました。徒歩と交通機関の利用で、60年前の大阪の変貌を確認しました。

それは西欧文明や、彼らの姿かたち、つまり見た目のかっこよさへの憧憬であった。明治維新から続く脱亜入欧という西欧列強への劣等感や、アメリカとの大戦敗北によってそれまで保守してきた日本文化の全否定は、私たちの教育環境や暮らしの志向を緩やかに変えてきた。少なくとも、私のように占領軍米兵を間近で眺めて育ち、欧米文明の恩寵や価値観を、自分たちの生活になじませてきた者にとっては、それが日常になっていく時代だった。だからわが国の伝統芸能や文化を無視したり、旧態依然としたしきたりや行事作法を否定するのを疑わず、旧モラルへの反逆すら当然だと思っていた。少なくとも欧米文明が、私たち文明の上流にあるものとする価値観を育てていたと思う。それは長い時をくぐって醸成されてきたものにちがいない。

それまでの日本文化にないものを見つけることが、実は自分たちが志ざす価値であり、音楽、美術、演劇、映画、文学など芸術の典型を欧米に求めたのであった。とくに私に関心を持たせたのは、親父が戦後集めたSPレコードと、50年代後半からの軽音楽（ポップス）やジャズ、映画音楽、クラシックなどジャンルがほとんど未分化にオンエアされていた欧米音楽のラジオDJ番組だった。

それまで親たちと一緒にラジオを囲んで聞いてきた歌謡曲や民謡、あるいは落語や漫才など伝統芸能からの離脱を起こし始めた。それは別世界の輝きであり、とんでもなくワクワクする瞬間をいつも経験させてくれた。米国に原爆を2発も落とされながらも、あのきらびやかな音楽の世界にあこがれ、その部分は愛憎の感情を超えていた、というよりどうでもよかったのだ。

60年代、キューバ危機やケネディー暗殺からベトナム戦争に至る冷戦時代の極みで、私たち日本人には日米安全保障条約が強行に締結された頃である。そして、それらは欧米を代表するアメリカ国家の一大事であり、とりわけベトナム戦争には、沖縄からファントムが飛び立ち、原子力空母エンタープライスの佐世保入港など、日本国家の一大事でもあった。中国からは日本の軍国主義復活を非難され、70年に安保条約は自動延長した。なにやら「集団的自衛権」を声高に叫ぶ現在の状況と重なってしまうのである。

ビートルズの来日以降、和製ポップスのバンドが現れ、GS（グループサウンズ）といわれるエレキギターを抱えた少年たちをたくさん輩出した。その頃の私は、そんな西洋猿真似の熱狂には背を向けていた。少なくともストーンズやビートルズなどに代表される本格的バンドは、日本には皆無だと考えていたのだ。

ポップスという言葉はその頃から定着し始めた言葉ではなかったか。歌謡曲、流行歌などと呼ばれてきた「はやりうた」が和製ポップスとなり今ではJポップスだ。ミュージシャンがアーティストなどと呼ばれるのがちょっと恥ずかしい。

現在、正統文化からはずれた副次的文化を称してサブカルチャーと呼ぶが、少なくとも当時は、文化や芸術活動を、政治や経済と接近し拮抗してカウンターカルチャー（対抗文化）と呼び、尖鋭性を持っていた。つまり文化性や芸術性そのものを拒否するというか、私たちは「お芸術」などと呼び自嘲したが、それは芸術に関わる者の含羞であった。また自己否定などという言葉で、日常的自己を裁くふりをし、それをスタイルにした時代でもあった。早川義夫というミュージシャンもそんな反小市民派で、『かっこいいことは、なんてかっこ悪いんだろう』（写真LP）というアルバムをプレスした。通俗化したマスコミや社会のみすぼらしい紋切り型価値観に背を向けたレコードだが、まさにカウンターカルチャーの面目を体現していたと思う。それはまた文化を担う早川の含羞でもあったと思うのだ。

国際社会の潮流が70年を迎えようとし、絵画や映画、音楽が互角に太刀打ちしていた頃、『ウッドストック』に次ぐロックな映画があらわれた。それは70年の私たち若者が持つ空気のようなものを体現していた。

（この項続く）

hidarimaki

思いたったら！
にしなりカレンダー

「夏らしく、大阪らしく、西成らしく」編

スケジュール

Art Way Osaka

西成★真夏のアートフェス

大阪らしいまち、西成から発信！お散歩感覚で、作る人と鑑賞する人が出会い、気軽にアートを楽しむ祭典です。メイン会場の西成区民センターでは手づくり作品のマーケットやワークショップを、区内やその周辺のギャラリーなどを巡るスタンプラリーも楽しめます。

日時：8月9日（土）11:00-19:00
　　10日（日）10:00-18:00
場所：西成区民センター（西成区岸里 1-1-50）
　　区内・市内会場
※区内・市内会場の開催日時、場所につきましては、web 等をご覧ください。
問合せ：西成区民センター
TEL：06-6651-1131
WEB：http://awo3.webnode.jp/

スケジュール

盆踊り大会

西成区北西部まちづくり推進納涼

夏らしくなり、そろそろ盆踊りの季節に。今年も西成区北西部自慢の盆踊り大会を開催。音頭に合わせて、夕暮れ時から涼みつつ、子どもも大人もみんなで年に一度の楽しいひとときを。盆踊り、夏祭り、地蔵盆など、夏はお祭が盛りだくさんです。

日時：8月1日（金）・2日（土）
　　19:00 - 22:00
場所：長橋３公園（西成区長橋 3-7）
問合せ：西成区北西部まちづくり推進納涼盆踊り大会実行委員会
TEL：06-6561-8800

レポート

砥石を使った包丁研ぎワークショップ

西成らしさと言えば、それは日本に誇れるいろんなモノづくりの企業です。靴、ナット、輪ゴム、型抜き菓子、ソースなど、伝統的なものから、先端技術を支えるもの、身近なものまでなどいろいろ。その一つ、業界トップの品質と生産量の砥石メーカー「ナニワ研磨工業株式会社」が、カフェ「あおぞらアトリエ」で、包丁研ぎの体験会を開催。普段、包丁研ぎになじみのない方や初心者を対象に、その魅力やコツをカフェで楽しく体験しながらマスターできるワークショップです。西成の技を地域から広げる取り組みになりました。

日時：6月24日（火）10:00-11:30
場所：あおぞらアトリエ（西成区岸里東 1-11-19）
主催：ナニワ研磨工業株式会社（西成区天神ノ森 1-17-17）
WEB：http://www.naniwa-kenma.co.jp/（ナニワ研磨）
http://aozora-atelier.com/（あおぞらアトリエ）

あとがき

先日、一足先に梅雨があけた八重山諸島へ遊びに行ってました。Peachが就航して関西からの客がすごく増えたとのこと。島への居住者も多くて人口も増えています。そして、観光、飲食など自分で自分の仕事を作ってる人が多いのにびっくり。いろんなところへ行って、いろんなものを自分の住む街にフィードバックできればいいなぁと、焼けてめくれてきた腕の皮を見ながら考えています。

（四井）

なび7月号（vol.89）
発行日：2014年7月10日（創刊日：2007年1月1日）
発行：株式会社ナイス
発行人：代表取締役 冨田一幸
印刷：有限会社前山企広
住所：大阪市西成区長橋3-6-33　電話：06-6563-1156
E-mail：info@nice.ne.jp
url：http://www.nice.ne.jp/

編集長：佐々木敏明
編集：田岡秀朋、平川隆啓、四井恵介、飯田沙保里
イラスト：hidarimaki
デザイン：近藤彩、高橋静香

表紙の写真「すきま花壇とねこのしっぽ」
撮影：大阪市立工芸高等学校 撮影研究部